

## 日本地震工学会の発足を祝って



### 中村恒善

日本学術会議第5部  
メカニクス・構造研究  
連絡委員会地震工学  
専門委員会委員長

京都大学名誉教授

日本地震工学会の設立総会にあたり、日本学術会議メカニクス・構造研究連絡委員会地震工学専門委員会を代表して、ご出席の皆様にご心からお祝いを申し上げます。また設立準備に尽力された関係者の皆様のご見識と組織構成に深甚の敬意を表します。この新学会の発足に際して、二十一世紀型の発展へ向けての希望を申し上げたく存じます。

グローバル化と高度情報化社会への移行が急速化している今日、日本地震工学会のような専門学会としてもまた、その情報環境の中で世界的視野での貢献が強く求められていると思います。色々の研究機関に属する研究者が挙げた成果の評価と公表は、専門学術団体または商業ベースの国際専門誌編集者集団に委ねられています。それらの研究成果が真に学術の進歩発展のために貢献する新鮮な成果であるかどうかの判定は、それらの専門家集団のピアレビュー機能に委ねられ、真に優れた新鮮な成果を選別できる見識にこそ信頼と高い評価が寄せられます。

ところが日本語論文集しか刊行していない我国の一部の学術団体は、世界水準の学術評価機関としての役割を果たせず、世界的に認知されるに至っていません。世界水準の成果を挙げている研究者であれば、当然国際的に評価の高い論文誌に自己の論文を掲載しようとする。評価の高いジャーナルにどのように優れた論文を掲載したかによって、その研究者の全体業績が評価されるのみならず、そこに掲載された論文は世界中で読ま

れ、そして被引用度も高くなります。今日そのように国際的に高く評価されている学術論文誌を発行している日本の学術団体がどれだけあるでしょうか。

日本学術会議第十六期第五部の、『学術情報発信基地 = 学術団体の強化・支援に向けて』と題する報告の中で、公的支援を求めるに値する学術団体の要件が三つ挙げられています。第一に学術評価機関として国際的に認知されていること、第二に国際的に流通する定期学術論文誌を発行していること、第三に社会と学術の意思疎通を促進するチャンネル機能を保持していること、の三つであります。

日本地震工学会発足にあたり、私はこの三つを目標として引用し、新学会が日本型の閉鎖社会とならないように関係者が尽力されることを強く希望いたします。地震工学の学問・技術は、情報通信分野と同様にグローバルな性格を持っています。情報通信分野では社団法人電子情報通信学会の構成ソサイエティ別英文論文誌の成功例があります。地震工学分野でも日本人の研究成果を定期刊行英文専門誌で発信するようになって初めて、世界水準の研究者からそれらの成果の公正な評価を受けることができると思います。

日本地震工学会とご出席の会員の皆様の、新しいご発展をお祈り申し上げて、私の祝辞の結びと致します。

2000年12月20日の設立総会における祝辞を掲載しました